



組織におけるアーティファクトと組織美学の可能性 ： 事物がシンボルとなるプロセスに着目して

竹中, 克久

(Citation)

社会学雑誌, 39:176-191

(Issue Date)

2022-11-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/0100482585>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482585>



《投稿論文》

組織におけるアーティファクトと組織美学の可能性

—— 事物がシンボルとなるプロセスに着目して ——

竹中 克久

明治大学情報コミュニケーション学部専任准教授

本稿では、組織研究・組織文化論におけるアーティファクトに注目し、それらがシンボルとなるプロセスについて論じ、最終的には組織におけるアーティファクトやシンボルに着目する組織美学の可能性を探る。まず第一節では我々の日常生活に現に存在している多様なアーティファクトについて触れ、続く第二節では人間の有する技術や意味解釈といったものがアーティファクトをシンボルたらしめているという視点を示す。第三節では、組織文化研究という視点からホーソン実験・アイヒマン実験といった社会心理学の実験を再考し、第四節では組織文化研究におけるアーティファクトについてE・H・シャイン、M・J・ハッチ、P・ガリアルデイらの理論を参照しながらその位置づけを明らかにする。第五節ではANT（アクター・ネットワーク・セオリー）の観点からアーティファクトと技術の関連性を明らかにする。第六節では本稿でえられた知見が組織美学にいかなる意味をもたらすのかについて述べる。

一 組織研究におけるアーティファクト

我々が所属・関与している組織——企業、病院、学校、刑務所など——には実に多くのアーティファクトが存在している。アーティファクトが何か、という厳密な定義については次節以降で展開するとして、ひとまずは、《人間の

営為によって、何かを成し遂げるために作られた有形の事物》としておきたい¹⁾。その上で、ある組織に入る際の光景を目に浮かべてみたい。まず組織に入る際に多くの場合、立派な「門」が建っている。フラットなユニバーサルデザインが採用されていることもある一方、何段もの石段を登らねばならないこともある。次に、その門に人が立っ

るのかどうか、その人の服装はどのようなものか。つまり、アーティファクトがそもそも不在なのか実際に存在しているのか、加えてその人物が身に纏う衣服がどのようなものなのかという差異がある。建物の高さや大きさにも差異がある。加えて建物に入った後の足下が重厚なタイル張りなのか、日本の伝統的な木張りのものなのか、機能性を重視したリノリウムの床なのか、はたまた足が沈み込むような赤いカーペットなのか。それぞれ、視覚（色合いなど）、聴覚（靴音など）、触覚（踏み込んだ足の感覚など）がそこでは発揮される。ときには嗅覚（フレグランスや消毒臭など）が働かされるような工夫が為されていることもあるだろう。五感をはじめとした人間の感覚を呼び起こすのがこのようなアーティファクトである。

ここに二つの写真がある。どちらも非常に著名な病院である。

ある大学系列の病院、そのなかで処方箋を受け取るために行動する際に要請される行為が右の図1の写真には端的にあらわされている。無機質な床の上にきわめて人工的なテープが付着されている。足跡のマークに従いながら、呼ばれたときには当該の列に並ぶことが示されているかのようだ。ここでは番号で呼ばれた際に、規則正しく並ぶことが要請されることも付記しておきたい。

左の図2の写真はどうか。角度はほぼ同じである。しか



図1 東京都多摩地域の病院①



図2 東京都多摩地域の病院②

しながら、自身の行為を事前に決めるような取り決めはない。確かに、呼ばれば並ぶことになるだろうが、あくまで自主的に並ぶという行為が推奨されているように感じられないだろうか。もともとはプラスチック製の細く薄い事物でしかないものですら我々の行為に影響を与える。ただのテープや足跡マークですら、我々にアーティファクトをシンボルに変えるチャンスを与えているのである。

組織研究者はこのアーティファクトに対して、その理論化を図ってきた。当初は技術に着目したH・A・サイモンが先駆的な存在であったが、後にシャインや、ハッチらの一九八〇年代の組織文化研究の中でそれは行われ (Simon, [1969]1996, Schein, [1985]2012, Hatch and Cunliffe, 2006)、一九九〇年代以降のガリアルデイやA・ストラットティによる組織美学や (Gagliardi, 1990a, Strati 1992, 1999)、B・ラトゥールによるANT (Latour, 2005) やその哲学的基礎を補強するP・P・フェルベーク (Verboek, 2011) が現れた。アーティファクトは、そこにあることがあまりにも当然であり、社会学をはじめとした社会科学はその存在を軽視する傾向があったことは否めない。アーティファクトによつて形成される「光景 (landscape)」「音景 (soundscape)」も同様に軽視されたほか、空間・場所 (space/place) にも多くの注意が払われることはなかった (竹中、二〇一四)。本稿では、アーティファクト概念の重要性を改めて提起す

るほか、そのアーティファクトと人間がどのようにかわるべきか、という問いに答え、それを組織美学の可能性として示すものである。

二 アーティファクトと人間の二つの所作 ——意味と技術

アーティファクトとは何か。人工物や文物、あるいはモノと訳される存在であるが、語源を辿ってみると、「人間の技術によつて」(arte)「何かを為すために作られた産物」(factum) である、ラテン語の *arte factum* に由来する言葉である。周囲を見回してみても、目の前にあるディスプレイ、その手前のキーボードやマウス、筆者が腰掛けている椅子、また着ている服など多くのアーティファクトに囲まれていることがわかる。おおよそ、アーティファクトでないものは非常に見つけることが難しい。

いくらか、アーティファクトかどうか判断するのが難しいと考えられるのが、机の片隅にあるトロフィーと、グラスの中の水くらいである。

トロフィーは成果等を表彰するために「人間の技術によつて」「表彰という行為を為すために作られた産物」なので、アーティファクトなのであるが、このアーティファクトには「名誉」「過去の栄光」といった意味が付与され

たシンボルでもある。

他方、氷はどうか。これは「冷蔵庫の製氷機能によって」「飲料を冷やすために作られた産物」である。ここで問題となるのが、冷蔵庫の製氷機能が果たして人間の技術なのかどうか、である。氷は0度を下回ると自然の力によって固体となる。その意味では氷は厳密にはアーティファクトではないはずだ。しかし、人間の技術によって、製氷機能を使うことによって人工的に0度以下の温度に下げた作られたものであれば、アーティファクトとなる。H₂Oという液体自体は自然界にあまねく存在する。自然界でもH₂Oは氷となるが、人間の技術によっても氷となる。その意味で、この氷という物体はアーティファクトなのかどうか簡単には判断がつかない事物でもあることがわかる。

ここで確認しておかねばならないことは次の二点である。まず一点目はハッチとカンリフも述べるように全てのシンボルはアーティファクトであるが、全てのアーティファクトはシンボルではないということである (Hatch and Cunliff, 2006: 二〇一八・二七六)。すなわち、個人の主観的な愛着や相互主観的な意味共有によってアーティファクトはシンボルとなる機会を得ることができるということである。人間は、「意味」解釈を行うことによってアーティファクトの変換プロセスに介入するのである。二点目として、

自然物↓アーティファクト↓シンボルという、事物(素材)の変換プロセスに人間の所作は「技術」として介入するということである。すなわち自然界でも存在する事物(天然水)と人間の技術によって産出された事物(人口水)には差異があるということである。ここには「人間の技術」という要素が介在している。単なる事物をアーティファクトに変換する際に作動するのが「技術」である。端的に図示化すれば以下ようになる。

シンボル ↑ アーティファクト ↑ 事物(素材)
 意味 技術

まず「なま」の事物(素材)が存在している。それらは人間の営みに沿うように技術によって加工される。そのアーティファクトの一部は、人間の意味解釈によってシンボルとなり得るのである。

三 初期の組織文化研究におけるアーティファクト

組織研究の萌芽段階において、アーティファクトが取り扱われることは少なかった。その例外として、組織研究の萌芽段階におけるホーソン実験における「照明」があげら

れる。これは大きな意味を持つアーティファクトであったことは否定できない。「照明をよくすれば能率が向上する」(大橋・竹林、二〇〇八・八) という科学的管理法の妥当性を実証しようと一九二四年から一九二七年にわたって後にホーソン実験と呼ばれることになる検証が行われた。ところが、よく知られているように、この実験は失敗であった。照明を明るくしようと暗くしようと、あるいは明るくしたもの、明確な因果関係は確認できなかったのである。照明は単なるアーティファクトではなく、その実験に参加する被験者たちには——その根拠や正当性はないもの——ある種のシンボルになっていたのであった。実験者たる研究者たちは単なるアーティファクトとして照明をとらえていたのに対して、被験者たちはそのアーティファクトに——実験に良い成果をもたらさねばならない、実験に選ばれたことは光栄である——といった異なる意味を付与していたのである。このことから、アーティファクトは人間の手を離れて作動するものではなく、それが多様に解釈される事物であることがわかる。ある種の事物(明るさを保つ装置)は、技術によってその明るさを人間にとつて適切なものに調整可能であるはずの存在でしかないはずであった。もちろん、この照明という技術は、人間に日光という自然物なしで作業を行うことを可能にさせている。その意

味では事物からアーティファクトという変遷を辿るプロセスが具現化されたものでもある。しかし、ここで強調したいのは、単なる事物であったはずのアーティファクト——照明技術——は特別な意味を付与されていとも簡単にシンボルとなり、実験者の思惑から離れるものになったという事実である。

同じように単なるアーティファクトから人間が大きく影響を受けた実験がある。S・ミルグラムによる「アイヒマン実験(ミルグラム実験)」である。一九六一年、国立科学財団から助成金申請が下り、ミルグラムは被験者を集め、偽の電気ショック実験を行う準備を進めた。表向きには「記憶の実験」と称し、新聞紙面にて被験者の求人を募った。被験者Bたちは実験室のドアのところまでグレーの実験用の上着を着た人物に会う(のちの実験者Aである)。白色では医者 の 権 威 というシンボルが発揮されるために、あえてグレーにしたとのことである(Bass 2004: 二〇八・一〇〇)。ミルグラムは、シンボル化される可能性が低いアーティファクトを用意したのであった。

実験のあらましは次頁の図3のように示すことができる。実験者Aと被験者(学生)Cはいわば「サクラ」である。実際には被験者(教師)Bのみが調査対象であった。Bが問題を出し、それにCが答えられないと電流を流す(ただし、本当は流れない)という状況を実験者Aが見守る中、

Bがどれほどまで電気ショックを与えるか、という実験であった。

Bは事前に四五ボルトの「ピリツ」とした痛みを体験し、「記憶の実験」に参加することとなる。実験を進める中、Cの苦痛は見えず、ただ「痛いー」「やめてくれー」といった声が聞こえるだけである。Bの前に存在するのは以下のアーティファクトである(図4)。

また、どれぐらいの電気ショックで人間がダメージを受けるのか、目安が示されていたという(図5)。

演技派の被験者(学生)Cは、電気ショックに対し、大きなリアクションをとったという。

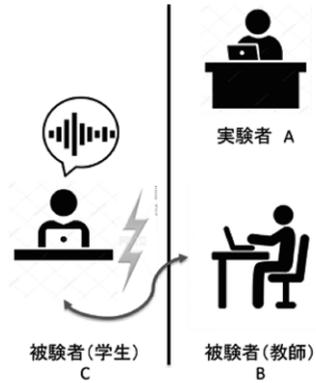


図3 ミルグラム実験の配置図

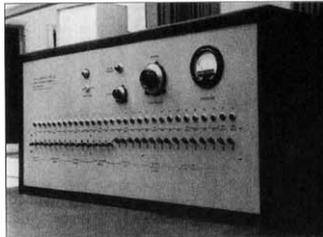


図4 電気ショック発生機(映画)(Blass 2004=二〇一八:一〇四より転載)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
15	--	--	75	--	--	--	135	--	--	--	195	--	--	--	255	--	--	--	315	--	--	--	375	--	--	--	435	450	
VOLTS	30	45	60	VOLTS	90	105	120	VOLTS	150	165	180	VOLTS	210	225	240	VOLTS	270	285	300	VOLTS	330	345	360	VOLTS	390	405	420	VOLTS	VOLTS
わずかな ショック	----	----	中程度の ショック	----	----	強い ショック	----	----	非常に 強い ショック	----	----	激しい ショック	----	----	----	非常に 激しい ショック	----	----	----	危険 強烈な ショック	----	----	----	----	----	----	----	----	XXX

図5 ミルグラム実験の操作パネルの模式図(Milgram, 1970=二〇〇八:四五より作成)

七五ボルト「うっ！」

一〇五ボルト「うっ！（大きな声で）」

一五〇ボルト「うわっ！—— 実験の先生、ここまでです。出してくださいよ。心臓が悪いって言ったじゃないですか。心臓の具合がちょっと変になりかけているんです。出してください。心臓がおかしい。もうこれ以上は拒否します。出してください。」

一九五ボルト「うわっ！—— 出してください。出してくれ。心臓が変だ。出してください！ここに閉じ込める権利はないはずだ！ 出せ！ 出してください！ 出せ！ 出しててください！」

三一五ボルト「（絶叫に近い苦悶の叫び）もう答えないっていっただろう。もうこの実験には参加してないからな」

三三〇ボルト「（絶叫に近い苦悶の叫び）ここから出せ！ 出してくれ！ 心臓が変だ。頼むから出してくれ。（ヒステリックに）出してくれ！ここに閉じ込める権利はないはずだ！ 出してくれ！ 出しててください！ 出せ！ 出しててください！ 出して！」

(Milgram, 1974 = 二〇〇八：八一—八三)

しかしながら、実験者Aの「続けてください」「続けてもらわないと実験が成り立ちません」「このまま続けるこ

とが実験にとっては絶対に不可欠です」「あなたにはほかに選択の余地はないんです」といった台詞に従い、Bは電流を流し続けた (Milgram, 1974 = 二〇〇八：七三—七四)。

実験のあらましを事前に聞いていた多くの心理学専攻の大学院生の「最大の電気ショックを与える者はごく僅かであらう」との予測を裏切り、最終的には六五%の被験者(学生)が致死量である最大四五〇ボルトの電気ショックを浴びせることとなった (Milgram 1974 = 二〇〇八：五一)。果たして、この電気ショック発生機という装置はアーティファクトはいかなる存在であったのだろうか。実際には電流を流さないこのアーティファクトに対して、彼／彼女らが格別の意味を込めていたことは想像に難くない。単なる金属やその他の硬質な素材で構成された事物は、シンボルとなったのである。

ホーソン実験では照明装置、アイヒマン実験では電気ショック発生機といったアーティファクトが、研究者が想定していた当初の意味づけを超えて、当事者自らがそれをシンボル化する傾向が発見されたのである。

ホーソン実験、アイヒマン実験とも、現代の科学からすれば科学的・倫理的に問題があったものであることは否定できない。しかし、その失敗から学ぶことができるのならば、人間はアーティファクトを自らシンボル化するという欲望を有しているという事実である。

このように初期の組織研究にかかわる実験を垣間見ても、アーティファクトが人間の有する欲望を喚起させる事物(素材)であることは否定できない。人間がシンボル化したアーティファクトは、人間の意志を超えて、人間を創造し統制する可能性があるのである。

四 組織文化研究におけるアーティファクトの位置づけ

前節までで見てきたようにようにアーティファクトは社会科学の中で、奇妙な位置づけに追いやられていた。実際に人間に何かを想起させる、そして想起したことを当然視させるアーティファクトであるが、やはりそれは事物にしか過ぎない。事物はまだ、科学的な営みの中ではその市民権を獲得できてはいなかったのである。しかしながら、組織研究の中では、アーティファクトを主題化しようとした試みがあらわれることとなった。先述のシャインである。

彼は組織文化の構成要素を考える上で、三つのレベルである「アーティファクト」「支持的価値」「基本的仮定」を考え、自身は基本的仮定を組織文化の本質であるとするアプローチを選択した(Schein, [1985] 2011 = 二〇一六)。MITで組織研究を進めていた彼は一九八〇年代に入って

議論の高まりを見せた「組織文化(organizational culture)」について、はじめて理論的な枠組みと図式、ならびに議論の方向性と問題点を明らかにした研究者である。彼は実践的な議論に加わるよりも、理論的なスタンスを堅持し、組織文化を三つのレベルに分けて考えた。「最も表層に現れるアーティファクト」を置くものの、それは解読不能なことが多く、それほどの力を注ぐべきではないとする。

シャインのモデルに対して、ブレイクスルーとなるモデルを提起したのが、コペンハーゲンビジネススクールのハッチを中心とする研究集団である。彼女らは以前より、古典的・近代的な組織論に対して「シンボリック・解釈的」なスタンスこそが重要であることを示唆していた(Hatch and Cunliffe, 2006)。シンボルを重視する彼女らは、三つのレベルを解体し、第四の項目を追加した。それが「シンボル」である。彼女らの図式は一九九三年にその原型が示されたが(Hatch, 1993)、現在でも改良が加えられている。彼女らの功績は二つにまとめられる。一つは、シャインが三つしか提示なかった要素に対して四つ目の次元を追加したこと、もう一つはその相互作用に重点を置いたことである。彼女らは次のような図式を提示する(図6)。

彼女らは、アーティファクトとは別に「シンボル」項を追加し、かつその相互作用に注意を払ったのである。いわば図の上半分がシャインの図式であるのに対して、図の下半分を追加したのであった。もっとも、彼女らのモデルはやや不十分なものに留まっているのも事実である。彼女らは確かにシンボル項を追加し、相互作用を分析したが、時

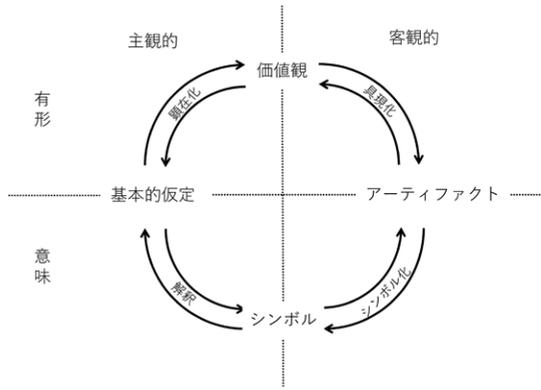


図 6 文化ダイナミクスモデル (Hatch 1993, Hatch and Cunliffe, 2006 = 二〇一七 : 三〇二)

計回りのサイクルしか説明できないでいる。ただし、アーティファクトがシンボルになり得る存在であることを明示したのは画期的なことであった。ただし、シンボル概念を持ち出せば、説明できているようであり、説明を回避している側面があるのも否めない。ホーソン実験やアイヒマン実験を振り返らずとも、全てのアーティファクトはシンボルになる可能性があるが、アーティファクトのまま我々の営為に強い影響を与えるのも事実であるからだ。

また、基本的仮定という「文化とはいったい何か」を重視するシャインに対して、ヨーロッパ圏の組織研究に属するイタリヤのガリアルディは、シャインを批判するスタンスに立つ。先に答えを示せば、彼はアーティファクトという「文化とはどのように示されるか」という項目を重視するのである (Gagliardi, 1990b: 245)。ガリアルディはシャインの図式(三層構造モデル)では「矢印」に注意が払われていないことを指摘し、暗に「基本的仮定」を重視しているシャインのスタンスを批判する。さらには、このシャインのモデルがあまりにも有名なものになってしまったがゆえに——すなわちこのモデルがある種のアーティファクトとなってしまう——、それが組織文化研究の方向性に強い影響を与えるものとなっていることにも警鐘を鳴らす。

筆者もガリアルディの姿勢に共感するところは少なくない。実際、彼の著作『シンボルとアーティファクト

『*Symbols and Artifacts*』(Gagliardi, 1990a) は、きびもヨーロッパ圏の組織シンボリズム研究や組織美学研究の基礎となっている。しかしながら、ガリアルディの影響を受けた組織美学論者の A・ストラッティが述べるように、いかにアーティファクトを重視しようとも、それを解読するのは現時点では難しいとの指摘があることも事実である (Straut, 1992: 569)。

確かにアーティファクトを見て、感じ、触ったとして、それをどう科学的に扱えば良いのだろうか。ここにガリアルディとストラッティの苦悩があるのは否めない。ここで我々はアーティファクトを単純にシンボルの原型ととらえてはいけないことに気づくことができる。第二節で、アーティファクトに意味が付与されたり意味解釈が行われたりした結果、アーティファクトがシンボルになり得る可能性について指摘した。しかし、もう一つの面である、事物がアーティファクトのまま我々の社会的生活に影響を与えることはないのだろうか。次節からは、ラトウールやフェルベークの議論を参照し、論を展開してゆく。

五 技術とは何か

ここまで、アーティファクトの重要性を論じながら、そのアーティファクトがいとも容易くシンボルに置換されて

分析されてしまっている現状について述べてきた。極言すれば、当の行為者たちはそれがシンボルであるかアーティファクトであるかを考慮せずに (考慮する必要なしに) 自らの所作を行っている。同じ事物がアーティファクトなのかシンボルなのか、はたまた単なる事物だったのか、それに注視するのは研究者だけかもしれない。社会はそれでも進行する。ただし、本当に何が起っているのか、そのメカニズムを明らかにすることこそが我々の使命である。

ここで、ラトウールによる二つの社会学——「社会的なもの社会学」と「連関の社会学」——の区別を持つ出すことは有益であると考えられる。前者の社会的なもの社会学は、いわゆる既存の伝統的な社会学と読み替えても良いだろう。後者の連関の社会学はラトウールが重要性を提示するアクター・ネットワーク・セオリー (ANT) である。社会的なもの——技術・科学・組織・経営など——が本質的なアクター・ネットワークであると考えるのが前者であるのに対して、実際の諸々のつながりを作っているのはそれ自体としては社会的ではない紐帯——あらゆる自然物・アーティファクト・人間行為——であると考えるのが後者である (Latour, 2005 = 二〇一九、一九二二)。換言すれば、社会は人間のコミュニケーションや行為からなる組織をはじめとした社会システムや、言語・貨幣・権力をはじめとするシンボルや意味のシステムとして存在しているのでは

なく、無数のアーティファクトや行為がアクターとして結びついたネットワークとしてとらえるのがANTである。

社会的なものの社会学者が信じているのは、一種の社会的なまとまりが存在し、多くの中間項があり、媒介子はほとんど存在しないことである。他方のANTの場合、他に勝る社会的なまとまりはなく、無数の媒介子が存在しており、そして媒介子が忠実な中間項に変わるならば、それはいつものことではなく、めったにない例外的なことであり、何らかの特別な手間をかけて説明される必要があることである——たいていは、さらに多くの媒介子をもって！ (Latour 2005=2019: 78-79 [傍点・感嘆符原著])

社会的なものの社会学においては、組織研究はいかに行われようだろうか。組織は人間のコミュニケーションから成立している。そのコミュニケーションには、シンボル・システムを形成している言語によって、上位者から下位者への命令・指示が行われる。また、上位者は同時に権力を示す「職階」によってその命令の正当性が付与されているほか、特別な空間（個室）の仕様を認められ、その権威の高さも維持されている、と考えるのが社会的なものの社会学に立脚した組織研究となる。

他方、ANTにおける組織研究はどうか。ANTの視線では、重厚なデスクと革張りの椅子がある空間の中で身だしなみの良いスーツを身に纏う人間がいて、そのスーツには正社員であるシンボルとなる金属製のパーツがピン留めされている。彼は知的な眼鏡に自らの手指を添えて、「どうしてできないんだ！」との音声で、頭を下げるもう一人の人間に浴びせられている光景として描かれる。

そこには正社員であるという特別な意味を有するシンボルのほか、デスク・椅子・眼鏡といった事物がある。これらの事物がシンボルとなるかどうかはほかのエージェント（人間やその行為）や、それが登場する空間の位置（建物内の個室なのか、共有部なのか、建物外の路上なのか）によって異なるだろう。しかしながら、事物自身がアーティファクトのままネットワークの一員となっていると解釈することも可能である。すなわち、ANTにおいては、アーティファクトがシンボルに変換される以前の段階を記述することができるとは、シンボルに変換される瞬間をも記述可能なのである。あるいはより正確に言えば、その瞬間しか記述できないともいえよう。

果たして、事物はそのまま人間の営為にかかわらず事物なのか。そのことを理解する補助線として「技術」というものに目を向けたい。技術と人間の関係を探る現象学的な系譜に立つフェルバーは著作の中で技術、あるいはアー

ティファクト（人工物）を目の前にして「物質の道徳性」を語ることは可能なのか、そしてそれは許されるのかどうかを問おうとする。「自動車に事故の責任を負わせようとするのか」といった嘲笑を受けながらも、技術に道徳的意義が存在する可能性を探るのである。

それが端的にあらわされているのがパートナーとの出産を控え、産科の超音波検査室において、ダウン症を「思っている」画家の絵を目にするシーンである。そこで、超音波検査をはじめ、出生前診断や、乳癌をはじめとした遺伝子診断検査という技術の存在を目の当たりにする。

突然変異遺伝子の発見は、健康な人間を潜在的な病人に変えてしまうのである。さらに、この検査は、先天的欠陥を回避可能な災厄に変化させる。…そして、その技術によってある人が特定の病気になる確率が非常に高いことを知ることができるという事実と、回避のために器官を除去することもできるという可能性によって、人は自分の病気に自分で責任を持たないといけなくなる。(Verbeek, 2011 = 二〇一五、一一)

フェルベークが例として掲げるのが、妊婦の超音波検査である。この技術によって、本来は視認できない胎児が、「赤ちゃん」として映し出される。しかも、母子一体の状態で

はなく「単独の人格」を持つような姿で現れ、かつそのサイズも「実際の」ものとは異なり、あたかもそのまま人格を伴って生まれてくる存在として、である。さらに、ダウン症をはじめとした遺伝子疾患の検査技術によって、胎児は生まれる前から「潜在的患者」として位置づけられ、それは転じて「潜在的介護者」としての役割を親にもたらし、可能性もある。フェルベークの言葉を借りれば、「技術は、単に人間に使用されるだけではなく、人間を構成することに介入してもいる」(Verbeek, 2011 = 二〇一五、八二)のである。技術は人間を幸福に導くものであることは否めない。しかし、技術はときに、胎児とその胎児を一〇ヶ月ものあいだ心待ちにする無垢な親であることを許さず、ごく初期の段階から「潜在的患者」と「潜在的介護者」に変換することも否定できない。単なる事物（この場合は生命体であるが）は、技術によって媒介されることによって、アーティファクト（人工的な「ケア」が可能な生命体）に変換されるのである。

生殖技術にかんじていえば、おそらくはフェルベークの予想を超えて発達が続いている。NIPPT³⁾の前では羊水検査や絨毛検査といった技術はもはや時代遅れのものとなっただけでなく、出生前の血液検査でかなりの確度の「患者」が発見されるまでになっている。その結果、「潜在的患者」の介護者となることを選択するかしないかという決断を親

に迫るまでになっている。

おそらく、今後あらゆる技術は人間の予想を超えて発達を続けることは間違いない。もちろん、不治とされてきた病を「治療可能」な病に変換することもあろう。逆に、現代の技術では「治療不能」だという決定を下す場合もある。人間は道徳的主体であることは明らかであるが、技術も道徳性を身に纏いながら生み出されていくのである。

本節では、技術に道徳性があるのか、それを使う人間に道徳性が求められるのか、という二分法に「収まりきらない」例をフェルベークの理論から抽出した。すなわち技術も人間も道徳的存在であろうとしても、そうなり得ない場合があるという事実の存在である。

さて次節では、アーティファクト・技術・事物の関係を組織研究に再投射したい。

六 組織研究のために

さて、ここまでアーティファクトや技術について述べてきたが、果たしてこれは組織研究に活かされることがあるのだろうか。筆者がここで主張したいのは、組織研究の複雑性である。組織のマネジメントを論じるのであれば、経営学的なアプローチが最善である。あるいは社会的な見地からは成員の疎外などを取り扱うこともできる。

では、アーティファクトに注目する組織美学には何ができるか。探し求めるならば、組織のリアルティでない組織の生々しさ——それもごく日常的なもの——を描くことができるという点が強みではなかるか。普段の何気ない組織とのふれあい、実のところ組織という感じづらい対象をビビッドに伝えてくれているという事実である。

もちろん、これら事物やアーティファクト・空間に着目するだけでは社会的に意味のあるものであったとしても組織研究特有の問題とはなり得ない。組織研究において重要となるのは例えば権力の問題である。組織美学の嚆矢の一人であるガリアルディを R・アルジョラスは以下のように読み解いている (Argolas, 二〇二〇)。

アーティファクトと同様に、空間もが組織において非常に重要な役割を果たしているのは周知の事実である。ガリアルディによると、組織の中の空間を意図的に工夫することにより、その組織内における人間同士の関係や行動の方向性を変えることができるという。彼は主著にて、空間が持っているその力の具体的に発揮された事例として、イタリア海軍の訓練施設で組織論について行った講義をあげている (Cragiardi, 1990b)。訓練生自身が興味のあるテーマを中心に語ることを目的に、ガリアルディが講義の前にディスカッションの時間を設けたいと希望する。しかしながら、イベントを担当していた将官に承認してもらえず、椅

子の位置が固定しており、窓のないホールで、非常に堅い雰囲気での一方的に講義を行うこととなる。その講義が終わり、休憩の時間に入ると、デイスカッションが別のホールで行われると将官から伝えられる。そして、そのホールは講義自体が行われた場所とは真逆の、ガリアルデイが当初に望んでいたものであったのである。そこにはホールの中に大きな窓がたくさんあり、訓練生が自由に使える黒板と、心地よく訓練生が互いに向き合えるような座席が用意してあった。ガリアルデイがその刺激的な空間に驚き、将官になぜそこで講義を行わせなかった理由を尋ねたところ、将官に意図的に空間を分けているとの説明を受けたのである。

上下関係が重要視され、厳しく守られている軍隊や海軍のような組織においては、上位者が言うことが絶対的とされ、訓練生から「よくわからない」や「異なる意見がある」などの発言が上位者の権力を否定することにつながる。しかし、第二次世界大戦後のイタリア海軍は将官の素晴らしさなどで知られており、そのような成果をもたらすためには、兵士と役員との間のコミュニケーション、そして兵士同士の意見交換やデイスカッションが不可欠とされている。それがゆえに、将官が「黙って上位者の話を聞く」空間と「兵士同士で積極的にデイスカッションを行う」空間

をあえて分けているというのがガリアルデイの結論となる(Gagliardi, 1990b: 14-15)。このように、組織のメンバーが、その組織における「空間」というものを意図的に工夫することによって、メンバー自身の行動や意思決定、そしてメンバー同士における人間関係に大きな影響を与えるという事実が明らかとなったのである。

事物(素材)・空間といった人間の社会生活において、人間と独立した存在であるこれらは、常にアーティファクトとなり得る。何かのために役立つように加工されるのである。そのアーティファクトは、ときに権力やリーダーシップというものを享受させるためのシンボルにも変換されるのである。

これらのシンボルは確かに一方で組織内の秩序を高めるだろう。しかしながら、本来関係のなかったものも権力の源泉として加工され、それに従うことを当然視する組織成員も生み出しかねない。組織研究において、事物(素材)・アーティファクト・空間といった無機質な対象を精査する必然性がここにある。

七 おわりに——人間とアーティファクトの共存関係に向けて

コロナ禍の中、筆者はある体験をした。処方箋薬局で妻

子の薬の処方 waited いたときである。日常であれば混んでいる薬局であるが、患者は少なく筆者の他には赤ちゃんとその母親だけであった。カランカランと音がし、振り返ると、抱っこされている赤ちゃんが自らの水飲みを落とし、たようであった。コロナ以前の社会であれば、その水飲みというアーティファクトを拾うことになったであろう。しかし、この未知のウイルスは接触によって感染されるケースが数多く報告されていた。薬局の前に立ち寄ったスーパーで買い物を終えた私の手は、「汚染された」可能性のある手となっていた。薬局なので消毒用のアルコールがあるわけだが、まさか赤ちゃんが口をつける可能性のあるものにその技術で「除染した」手で触れることもできない。筆者の身体の一部である「手」はコロナウイルスによって特別な意味を持つシンボルに必然的に変換され、その「手」は筆者以上に声を発する存在に変換されていたのである。

註

- (1) アーティファクト (人工物) に関して先駆的な研究として、H・A・サイモンによるものがある (Simon, [1969]1996 = 一九九九)。サイモンはコンピュータプログラムといったものも含めてアーティファクトであるとす。それは「自然／人工」という区分から議論を始めるところによる。同様のスタン

スは榎木哲夫編の著作にも示されている (榎木、二〇一八)。本稿では、人工というよりは、有形性 (物理性) にアーティファクトの原型を見つつ、組織文化という無形なものとの対比を念頭に置き、後に技術という無形の存在に話を進めてゆく。

- (2) WEB上の原語辞典サイトである <https://www.etymonline.com/> による。

- (3) 二〇一九年六月の組織学会研究大会における同氏の講演でも触れられることはなかった。むしろ、時計回りのサイクルはスバイラル的な軌道を描くように示されていた。

- (4) ある種の障害を有していたからといって介護が必要なわけではない、介護を受けること自体も一つの行為でしかない。本稿では、障害者・ケアラーという図式が登場しかねない瞬間を記述しているものである。

- (5) 無侵襲的出生前遺伝学的検査。英語では non-invasive prenatal genetic testing となる。

文献

Argiolas, R., 二〇二〇, 「接客現場における組織美学の重要性」『情報・コミュニケーション』一三三: 二〇三—二二二。

Blass, T., 2004, *The man who Shooked the World: The Life and Legacy of Stanley Milgram*. Basic Books. (= 二〇〇八、野島久雄・藍澤美紀訳『服従実験とは何だったのか——スタンレー・ミルグラムの生涯と遺産』誠信書房)

Gagliardi, 1990a, *Symbols and Artifacts: Frenvs of the Corporate Landscape*. Walter de Gruyter.

- _____, 1990b, "Artifacts as Pathways and Remains of Organization Life," P. Gagliardi, ed., *Symbols and Artifacts: Views of the Corporate Landscape*: Walter de Gruyter: 3-38.
- Hatch, M. J., 1993, "The Dynamics of Organizational Culture," *Academy of Management Review*, 18(4): 657-693.
- Hatch, M. J., and Cunliffe A. L., 2006, *Organization Theory: Modern, Symbolic, and Postmodern Perspective*, second edition: Oxford University Press. (＝二〇一七、大西博司・日野健太・山口義昭訳『H a t c h 組織論』同文館出版)
- 久保明教、二〇一九、『ブルーノ・ラトウールの取説——アクターネットワーク論から存在様態探求へ』月曜社。
- Latour, B., 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford University Press. (＝二〇一九、伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局)
- Milgram, S., 1974, *Obedience to Authority: An Experimental View*, Harper & Row. (＝二〇〇八、山形浩生訳『服従の心理』河出書房新社)
- 榎本哲夫編、二〇一八、『アーティファクトデザイン』共立出版
- Schein, E. H., [1985] 2011, *Organizational Culture and Leadership*: Jossey-Bass Inc. (＝二〇一二、梅津祐良・横山哲夫訳『組織文化とリーダーシップ』白桃書房)
- Simon, [1969]1996 1, *The Sciences of the Artificial*, third ed., Cambridge: the MIT Press. (＝一九九九、稲葉元吉・吉原英樹訳『システムの科学(第三版)』パーソナルメディア)
- Strati, A., 1992, "Aesthetic Understanding of Organizational Life," *Academy of Management Review*, 17(3): 568-581.
- _____, 1999, *Organization and Aesthetics*: SAGE publications.
- 竹中克久、二〇一四、『組織における物理的環境についての社会学的アプローチ——空間、風景、アーティファクト』『明治大学教養論集』五〇一、四七—六五。
- Verbeek, Peter-Paul, 2011, *Moralizing Technology: Understanding and Designing the Morality of Things*: The University of Chicago Press. (＝二〇一五、鈴木俊洋訳『技術の道德化——事物の道德性を理解し設計する』法政大学出版局)
- (二〇二二年十月十五日投稿受理、
二〇二三年八月三日掲載決定)